

# コロン分類法の発想を用いた授業実践

## －図書館情報資源特論における試行的演習の報告－

永野 篤  
(キャリア開発総合学科)

### I. 目的

図書館情報学教育において、分類法は情報資源組織を理解するうえで重要な位置を占めている。図書館における図書の分類は、単なる記号付与や目録上の処理にとどまらず、書架配置と密接に結びつき、利用者の探索行動や情報発見の在り方に直接的な影響を与える要素である。情報化の進展により、MARC（マーク：Machine-Readable Cataloging）やOPAC（オーパック、Online Public Access Catalog）を通じた検索環境は大きく変化した。これによって分類の意義が失われたわけではない。むしろ、検索と書架利用が併存する現在の図書館環境において、分類をどのように捉え、どのように活用するのかをあらためて問い直す必要性が高まっている。

しかし、実際の授業においては、分類表の構造や用語の説明が中心となりがちであり、学生が「なぜ分類するのか」「分類することで何が可能になるのか」を具体的に実感しにくいという課題が指摘されてきた。たとえば Ocholla & Ocholla (2014) は、分類や目録に関する教育において、学生が分類の意義や判断過程を理解することの難しさを指摘しており、分類概念が抽象的に捉えられがちである点を課題として挙げている<sup>1)</sup>。探索行動や情報探索と分類概念との関係は、初学者にとって把握しにくい傾向がある。

本実践には、このような課題意識のもと、DDC や NDC といった標準的分類法だけで

なく、各国において独自の分類体系が発展してきたことを紹介した。たとえば、アメリカでは公共図書館を中心にデューイ十進分類法 (DDC) が用いられ、学術図書館ではアメリカ議会図書館分類法 (LCC) が主流である。日本では日本十進分類法 (NDC) が広く用いられ、国立国会図書館では独自の NDLC が採用されているほか、国際的には UDC、中国では CLC、韓国では KDC など、それぞれの出版文化や利用実態に応じた分類法が存在する。このように、分類法は普遍的・唯一の体系ではなく、社会的・文化的背景と密接に関わりながら形成されてきたものである。

こうした分類や目録の前提となる考え方は、日本目録規則 2018 年版（以下、JCR2018）にも明確に示されている。JCR2018 は、FRBR 等の概念モデルを基礎とし、情報資源を「実体」「属性」「関連」という枠組みで捉える実体関連分析の手法に依拠している（図 1）。これは、図書や著作を固定的な対象として扱うのではなく、複数の要素と関係性の集合として理解する立場を示すものであり、分類や検索が特定の概念モデルに基づいて構築されていることを示している。

こうした分類思想の多様性を踏まえううえで、本実践では、インドにおいてラングナタンが提唱したコロン分類法に着目した。コロン分類法は、分類を単に「棚を作るための技法」としてではなく、主題を複数の観点から分析し、再構成するための思考の枠組みとし

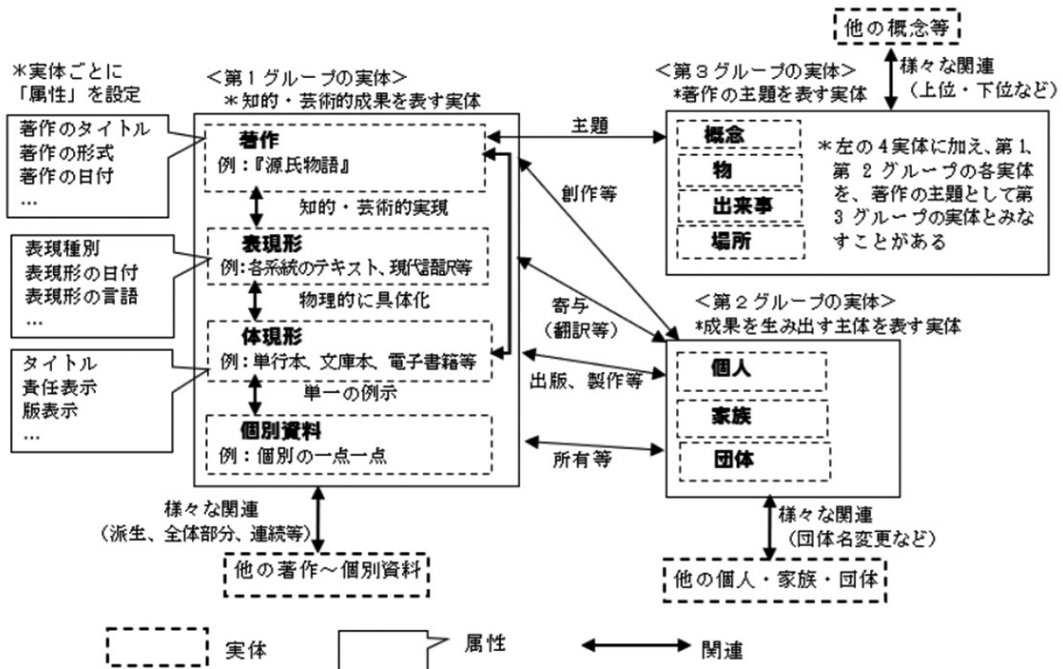


図1 日本目録規則2018年版が依拠する概念モデルの概要<sup>2)</sup>

て捉える点に特徴がある。図書館学の基礎として広く知られるランガナタンの五法則は、図書館を利用者のための動的な仕組みとして捉える思想を示しているが、その思想が分類法における主題分析の考え方や結びついている点は、必ずしも十分に理解されているとは言いがたい。

本稿では、コロソ分類法の理論体系を詳細に解説することを目的とするのではなく、「主題を複数の観点から分解し、再構成する」という発想を、授業実践の中でどのように導入し、学生が分類や検索を「結果」ではなく「思考の過程」として捉えるようになる過程に焦点を当てる。具体的には、短期大学における図書館情報資源に関する特論の一環として行った演習をもとに、授業設計とその展開を整理し、学生の反応や実践から得られた示唆を明らかにすることを目的とする。理論的

考察に過度に踏み込むことは避け、実践発表として、今後の授業改善や他の教育現場への応用可能性を検討するための基礎的資料を提供する。

## II. 活動内容 (授業設計の考え方)

本実践における授業設計では、コロソ分類法を体系的な分類表として教授するのではなく、主題を多面的に捉えるための思考枠組みとして再解釈し、学生が自ら考え、言語化する過程を重視した。従来の分類法教育では、分類記号の構造や規則の理解が中心となりやすいが、本実践ではそれらを最終的な到達点とはせず、主題分析の手前にある「問いの立て方」に焦点を当てた。

具体的には、コロソ分類法の特徴であるファセットの考え方を援用し、ひとつの主題を単一の視点で捉えるのではなく、複数の観

点に分解して整理する活動を授業の中心に据えた。本実践で用いた主な観点は、PMEST (personality, matter, energy, space, time。主題、視点・方法、対象、時間、空間)の五つである。これらはコロソ分類法の基本的な発想に基づくものであるが、さらに細かい分類記号や記号合成の規則には踏み込まず、あくまで思考整理のための枠組みとして扱った。ただし、専門用語の理解が先行しすぎないよう、ファセットという語は必要に応じて用いながらも、「何について」「どのような視点で」「誰・何を対象に」「いつ・どこで」といった、学生にとって身近な問いの形に言い換えて提示した(表1)。これにより、学生は分類を「正解を当てる作業」としてではなく、「主題をどのように切り取るかを考える作業」として捉えることが可能となる。

また、授業設計においては、分類と検索行動との関係を意識的に結び付けることを重視した。分類は図書館の内部処理にとどまるものではなく、検索語の選択や情報探索の方向性にも影響を与えるという点を示すことで、分類法が実務や利用者行動と連続した概念であることを理解させることを狙いとした。

以上のように、本実践では、コロソ分類法を理論として網羅的に教授するのではなく、情報資源を捉えるための「考える道具」として限定的に導入する授業設計を行った。この設計思想が、後述する授業の具体的展開および学生の反応にどのように反映されたのかを、次章において詳述する。

### Ⅲ. 活動内容(授業の具体的展開)

本実践の対象は、1年次後期開講科目「図書館情報資源特論」を履修した学生23名、および2年次後期開講科目「図書館制度・経営論」を履修した学生16名である。前者は図書館情報資源論の派生として図書の性質や

情報資源の捉え方を学ぶことを目的とし、後者は情報資源組織論・情報資源組織演習での学習を踏まえ、図書館経営における利用者ニーズの観点から分類を再考する補足的事例として位置づけて実施した。なお、2年次の演習は同一年度後期に実施したものであるが、1年次の実践とは異なる学生群を対象としており、継続的な追跡調査ではない。

「図書館情報資源特論」では、授業の初期段階において、まず大学図書館を訪れ、図書館が提供する情報資源とその検索環境について理解を深める学習を行った。学生は、データベースやOPACを実際に操作し、検索インターフェースや検索結果の表示方法を体験的に学んだ。この段階では、検索方法の習得そのものを目的とするのではなく、「図書館の情報とはどのような構造で提示されているのか」「検索結果はどのような考え方に基いて並べられているのか」といった点に注意を向けさせた。

あわせて、図書館システムが単一の形で存在しているわけではなく、複数のベンダーによって設計・提供されていることを紹介し、システムごとにインターフェースや検索体験が異なることにも触れた。こうした学習を通じて、学生は図書館システムを「与えられたもの」として利用する対象ではなく、「設計された仕組み」として捉える視点を持つようになった。授業ではさらに、現在普及している図書館システムが唯一の解ではなく、将来的には異なる発想に基づく新たな図書館システムが生まれる可能性があることを提示し、「新しい図書館システムを構想するとしたら、どのような考え方が必要になるのか」という問いを学生に投げかけた。

この問いに対する思考を深める試みとして位置づけたのが、コロソ分類法の発想を用いた演習である。学生はランガナタンの思想や

図書館学の基礎的事項については既習であることから、理論の再確認ではなく、それらの思想が実際の情報資源の構造化や検索の在り方とどのようにつながり得るのかを考察することを目的とした。演習では、既存の分類体系や検索インターフェースを前提とするのではなく、主題を複数の観点から分解し、再構成するというコロソ分類法の発想を手がかりとして、「もし新たに情報資源を整理するとしたら、どのような視点が考えられるか」を検討させた。

この過程を通じて、学生は分類や検索を固定的な技術としてではなく、思想や目的によって変化し得るものとして捉えるようになった。図書館の現行システムの理解から出発し、その延長線上としてコロソ分類法を用いた演習を位置づけたことにより、情報資源組織を静的な知識として学ぶのではなく、動的に再構築可能な対象として捉える学習経験が形成されたといえる。

なお、演習に先立ち、コロソ分類法におけるファセットと日本語による説明を整理した資料(表1)を提示し、具体的な作品を例として教員によるモデル提示を行った(表2)。本実践で参照したコロソ分類法は全体として42のクラスから構成される分類体系であるが、学生に対してはNDC的な分野指定として簡略化して提示し、ファセット抽出においては分類理論を過度に意識せず作業を進めるよう指導した。

表1. コロソ分類法とファセットの日本語説明

英語	原義	わかりやすい日本語表現	イメージ・質問例
P (Personality)	主題の核・人物・中心概念	主役・テーマ・中心人物	「誰や何が中心の話か？」
M (Matter)	材料・対象・領域	対象・もの・環境	「何を扱っているか？」
E (Energy)	行為・働き・過程	行動・出来事・動き	「どんなことが起きているか？」
S (Space)	空間	場所・舞台	「どこで起きているか？」
T (Time)	時間	時代・時間	「いつの話か？」

表2. 複数視点とコロソ分類法による具体例

サンプル①: 夏目漱石『坊っちゃん』

読み取りセットA (教育の視点)

ファセット	内容	意味・読み取り
主役 (P)	教師(坊っちゃん)	主人公としての教育者像
対象 (M)	学校・生徒・教育制度	教育という社会制度
行動 (E)	教える・葛藤・成長	教育活動と内面の成長
場所 (S)	松山(地方都市)	地方と中央の対比
時代 (T)	明治時代	近代化の初期、日本の転換期

読み取りセットB (青春・成長の視点)

ファセット	内容	意味・読み取り
主役 (P)	青年	成長途中の若者像
対象 (M)	人間関係・社会の常識	大人社会の不条理
行動 (E)	ぶつかる・反発・理解	社会の中での自己形成
場所 (S)	松山	自分の居場所探しの舞台
時代 (T)	明治時代	青年が新しい価値観に出会う時代

ここでは、分類理論としての詳細な説明は行わず、一つの作品であっても、複数の視点から捉えることが可能であるという点を理解させることを重視した。具体例としては、小説作品を取り上げ、物語の内容、舞台、登場人物、扱われているテーマ、時代背景など、異なる観点から同一の作品を整理できることを示した。その際、主題を五つの観点(ファセット)に分け、それぞれのファセットにどのような要素が含まれ得るのかを可視化することで、コロソ分類法の発想が作品理解や情報整理と結びつくことを示した(表2)。

この導入を踏まえ、学生は個人またはグループで関心のある図書を一冊選択し、その作品についてファセットを用いた分析を行う演習に取り組んだ。演習には二回分の授業時間を充て、初回では主題の分解とファセットの設定を行い、次の回ではそれらを整理・統合したうえで発表資料を作成するという流れとした。

演習においては、ファセットの設定や内容

について厳密な正解を求めるのではなく、「なぜその視点を選んだのか」「別の切り取り方は可能か」といった点を重視した。これにより、学生は分類を固定的な枠組みとしてではなく、情報資源をどのように意味づけるかという思考の過程として捉えることができるようになる。

最終的には、各自または各グループが作成したファセット構成について発表を行い、同じ作品であっても、視点や関心の違いによって整理の仕方が大きく異なることを共有した。この発表を通じて、分類や情報構造は一義的なものではなく、目的や利用者像によって多様に構築され得ることを、学生自身の試行を通じて確認する機会となった。

#### IV. 活動成果（学生の反応・成果／課題）

##### IV-1. データベース見学後の反応（1年次）

本実践では、演習後に体系的なアンケートや感想収集を行うことはできなかった。そのため、本章では、授業内での学生の発言や提出物、教員による観察を中心に、学生の反応や成果について整理する。また、演習に先立って実施した図書館データベース見学後の学生の感想を、実践全体を理解するための補助的資料として位置づける。

図書館データベースおよび検索インターフェースの見学後、学生からは、「同じ資料を探しても、検索の仕方によって結果が大きく変わる」「検索画面は使ってきたが、その裏側の仕組みを意識したことはなかった」といった感想が多く見られた。これらのコメントから、学生は図書館システムを単なる利用手段としてではなく、情報がどのような考え方に基いて整理・提示されているのかという視点で捉え始めていることがうかがえた。筆者としては、この段階で、情報資源の構造そのものに対する関心が喚起された点を、本

実践の重要な出発点であったと捉えている。

一方で、コロソ分類法を用いた演習の過程では、学生が主題を複数の視点から整理することに難しさを感じる場面も多く見られた。特に、ファセットをどのように設定すればよいのか、また、それぞれのファセットがどの程度独立しているべきかについて、学生は試行錯誤を重ねていた。この段階では、教員が個別に学生とやり取りを行い、「なぜその視点を選んだのか」「別の切り口は考えられないか」といった問いかけを行うことで、思考を促す支援を行った。

演習の初期には、一つの著作を単一の観点でしか捉えられない学生も少なくなかったが、授業を進めるにつれて、多くの学生が複数の視点を意識するようになった。最終的には、多くの学生が、一つの著作に対して少なくとも三つの異なる視点を設定し、それぞれについて説明することができるようになった。この点を、本実践における一定の成果として位置づけている。

以上の結果から、コロソ分類法を用いた演習は、短時間で高度な分類理解を求めるものではなく、情報資源を多面的に捉える思考態度を育成する点において一定の効果を持つことが示唆された。一方で、演習の成果をより明確に把握するためには、事後の振り返りや感想の体系的な収集が今後の課題として残された。

##### IV-2. コロソ分類法演習に対する反応（2年次授業における補足的事例）

1年次への実践とは別に、2年次の授業において、コロソ分類法を用いた演習を実施し、学生を対象にアンケートを行った。この演習では、ニューヨークおよび仙台の複数の図書館について調査した後、図書館経営や利用者の観点を踏まえたコロソ分類法による整理を

行わせた。

アンケート結果からは、視点や対象、行動の設定に強い難しさを感じた学生が多いことが明らかになった。特に、誰を主役として捉えるのか、どの程度の粒度で視点を切り取るのかについて試行錯誤する様子が見られた。また、PMESTの各要素、とりわけEnergy(行動)やMatter(対象)について、何を記述すべきか分からず苦労したという意見も多く見られた。

一方で、多くの学生が、こうした困難さを感じながらも、コロン分類法に肯定的な評価を示している。「コロン分類は記述が難しかったが、人物や視点を変えて一つの作品を多角的に捉えられる点が印象的だった」「対象や行動、視点の設定には苦労したものの、あらずじ以上に作品内容が理解できる」「図書館で用いれば食わず嫌いを減らし、新たな本との出会いにつながると感じた」など、図書館において新たな本との出会いが生まれる可能性や、従来は関心を持たなかった分野への興味が広がる可能性を指摘する意見もあった。

以上の結果から、コロン分類法は、学生にとって決して容易な方法ではないものの、情報資源を多面的に捉える思考態度を育成する点において有効であることが示唆される。本実践における1年次の授業とあわせて考えると、学年をまたいだ段階的な導入によって、分類や情報資源組織に対する理解を徐々に深めていく可能性があると考えられる。

## V. 今後の課題(考察)

授業の前半で実施した図書館データベースおよび検索インターフェースの見学は、学生にとって、情報資源がどのような設計思想に基づいて提示されているのかを意識する契機となった。検索結果や画面構成を「使う側」の視点だけでなく、「作られたもの」「設計さ

れたもの」として捉える姿勢が見られた点は、その後のコロン分類法演習へとつながる重要な前提であったと考えられる。

コロン分類法を用いた演習においては、学生が主題を複数の視点から整理することに難しさを感じる場面も多く、分類の思考が必ずしも直感的なものではないことが明らかになった。しかし、この「うまく進まない過程」そのものが、分類や情報構造が自明ではなく、思考と選択の結果として構築されるものであることを理解する契機となったと捉えることができる。教員と学生との対話を通じて視点を増やしていく過程は、分類を固定的な技術としてではなく、動的な思考活動として位置づける本実践の狙いと合致していた。

2年次の授業においては、作品を多角的に捉えることができた点や、読書体験そのものが変化した点を肯定的に評価している。本稿では詳細な比較分析は行っていないが、1年次と2年次学生の間には、図書館学習に関する知識と経験の差があったと考えられる。

最終的に、多くの学生が一つの著作に対して複数の視点を設定し、それらを言語化できるようになった点は、短期的な実践として一定の成果であったと評価できる。この成果は、分類記号の正確さや体系理解といった従来の評価軸では測りにくいものであるが、情報資源をどのように捉え、どのような切り口で整理し得るのかを考える態度の形成という点において、教育的意義を持つものと考えられる。

本稿では、主として「図書館情報資源特論」における授業実践として、コロン分類法の発想を取り入れた演習の設計と展開について報告した。本実践は、分類法を体系的知識として習得させることを目的とするのではなく、情報資源を多面的に捉え、構造化するための思考の枠組みを体験的に理解させることを意図したものである。

「図書館情報資源特論」は、1年次後期に開講される選択科目であり、学生にとっては、今後本格的に学習していく情報資源組織や分類・目録に関する専門的内容への導入的な位置づけを持つ。その段階において、既存の図書館システムや分類体系を所与のものとして受け入れるのではなく、「なぜこのような整理が行われているのか」「別の整理の仕方は考えられないのか」と問い直す経験を提供した点に、本実践の意義があると考えられる。

本実践を通じて得られた、多くの学生が一つの著作を複数の視点から捉えようとした経験は、2年次に履修する情報資源組織演習や関連科目において、分類や検索をより主体的に考えるための基盤となることが期待される。分類規則や体系的知識を学ぶ前段階として、情報資源をどのように切り取り、どのような観点で整理するかを考える姿勢を育成することは、教育上重要な意味を持つ。

また、本実践は、図書館の現行システムを理解することにとどまらず、将来の図書館や情報資源のあり方を構想するための思考実験としても位置づけられる。分類や検索を固定的な技術ではなく、思想や目的によって変化し得るものとして捉える視点は、今後の図書館システムや情報環境を考える上でも有効であろう。本実践が、情報資源組織教育の新たな展開を検討するための一つの試みとして、今後の授業改善や教育実践に活かされることを期待したい。

## VI. 文献

- 1) Ocholla, L., & Ocholla, D. N.  
Cataloguing and classification education and training in library and information science/studies departments in South Africa. *South African Journal of Libraries and Information Science*, 80 (1), 1-10.  
<https://doi.org/10.7553/80-1-166>

- 2) 日本図書目録規則 2018 版  
日本図書館協会目録委員会編 (2018) 『日本目録規則 2018 年版』日本図書館協会. (統合ファイル, 2025 年 5 月 1 日時点)

## VII. 注

本稿では教育的配慮から PMEST (personality, matter, energy, space, time. 主題、視点・方法、対象、時間、空間) のように整理して用いている。